

### 百聞は一見に如かず

——インドについて想うこと

一カ月にわたる海外視察を終えて考えると宗教の国インド、誇り高い歴史の重みを感じたフランス、広大な自然の中に今なお続く開拓精神をアメリカ・ルイジアナに見た。その中でも今も心に強く残っている国はインドである。

灼熱の太陽、鼻につく異様な匂い。道路にあふれる人の波、けたたましく走り回る車。小陰でぼろ布をまとい寝ころぶ路上生活者。「ワン・ダラー」とバスから降りると群らが



▲インド・アーメダバードのヴィシャウアパラティ学校  
中学三年「理科の実験」

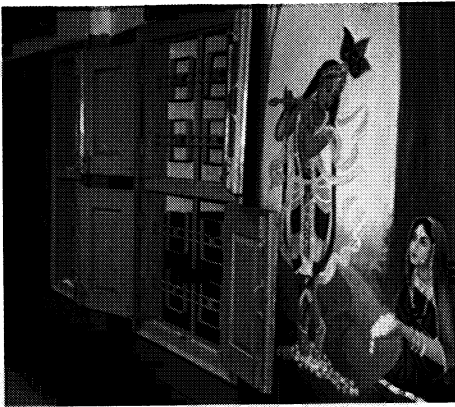
る物売りと不具者の物ごいなど。同じ地球上にこのような現実の世界があるのかと目を見張る。

法律の上での身分制度（カースト）は、すでに廃止されているそうだが、いまだ暗黙ながらもインド社会に根強く残っている。

卑下されても、踏まれても自分の生活ペースを守り雑草のようにはい上がろうとする生命力、たくましいまでの生活力に驚嘆した。

インドでの学校訪問では、薄暗い教室にあらをかき、乏しい教材教具を分かち合い、子どもたちが真剣なまなざしで学習に取り組む姿、貧しい中にも希望に満ち美しいまでに澄んだ目の輝きは、ふさぎきつた私の心を和ませてくれるに十分であり、インドの明るい未来を象徴しているかのようでもあった。

物がはん乱し、物を大切にする心を忘れて、豊かな生活にどっぶりつかり、なにを比べてもあまり感動しない我国の子どもたちと比較



▲アーメダバードの学校の廊下  
(同校は町のアパートを改造したもの)

### ▼同校でのバレーボール理論の授業 (実技は他の施設を借りて実施する)



したとき、教育の立場にある一人として強く反省させられた。

生活様式、ことばの違いに戸惑い、毎日が緊張と感動の連続であり「百聞は一見に如かず」そのものであった。

（昭和五十九年度文部省教員海外派遣長期三十一団  
昭和五十九年十一月七日～十二月六日）

「浪江町立浪江中学校教諭  
吉田 規正」